Den-en Chofu University
Annual Report of the Course for Teaching Profession
No.8 2025

田園調布学園大学教職課程年報

第 8 号

2025 年 2 月

田園調布学園大学

公園でのオープン形式によるこども食堂と障害福祉
―青色信号と黄色信号の家庭やこどもとのかかわりが始まる場所―

小林　貴大，五島　史子

Ⅰ．目的と背景

近年，日本においては「こども食堂」という取り組みが広まり，2012年に東京都大田区で誕生してから爆発的に増え続けている。認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえによる2023年の調査では，全国に9132個所あると発表された。この数字は中学校（公立，義務教育学校）の数とほぼ同数であるが，小学校（公立，義務教育学校）の数18870個所を目標としている[1)]。こども食堂は，経済的な支援のみを提供する場所ではなく，地域の子どもたちが安心して過ごせる場所，そして多様な世代が集う交流の場としての役割を果たしている。

特に，公園という公共空間でオープン形式により行われるこども食堂は，これまでの室内型の活動とは異なり，地域の誰もが自然に参加しやすい環境を提供することができる。公園という場はもともと，遊びや散歩，スポーツ，休憩などの目的で多くの人が訪れる場所である。そのため，こども食堂を公園で開催することで，多様な人々が足を運びやすくなり，自然に集まることができる場所になる。つまり，公園型こども食堂は，こども食堂1号店といわれる近藤氏の提唱する「どなたでもどうぞ」という理念を具現化している[2)]。

また，湯浅が根強い誤解だと言い続けてきた「こども食堂は貧困の子どもを集めるところ」という間違った社会的イメージを解消する開催形式となっている[2)]。さらに湯浅は，居場所にはwell-beingが必要不可欠であり，well-beingを「ごきげん（な状態）」「ごきげん（な暮らし）」と訳し，その場所でごきげんに過ごせることがその人にとっての居場所になる条件となり，居場所とはすべての人がごきげんに暮らすために不可欠要素であると述べている[3)]。公園型こども食堂は，室内型こども食堂と比べ，多くの人が集まりやすいことから，多くの人にとっての居場所となることが期待される。

本論文の目的は，公園で実施するオープン形式のこども食堂が，貧困支援という枠組みを超え，多世代交流や障害児・者との共生の場として機能し得ることを考察していくことである。特に，地域の家庭が抱える問題は多様である。湯浅は子どもが置かれている状況を信号機の色で例えている[2)]。経済的に厳しい相対的貧困状況である「赤信号」や「黄色信号」の家庭だけでなく，経済的に安定している「青信号」の家庭も含めて，こども食堂にどのように関わり，

またその活動からどのような影響を受けているのかを検討することが必要だと述べている[2]。そこで，本研究では，経済的背景に関わらず，さまざまな背景を持つ家庭や子どもたち，そして障害を持つ地域住民のつながりを深め，地域全体の福祉や連帯感の向上に寄与し得るこども食堂の可能性について，事例を通して探っていく。

Ⅱ．室内ではなく公園でこども食堂を開催することの意義

湯浅によると，こども食堂は交流型と支援型の2種類に分けることができ，約8割が参加に条件がない誰でも参加ができる「交流型食堂」と言われている[4]。したがってその多くが，多世代交流や地域交流拠点としてのこども食堂として活動をしている[4]。

こども食堂を，公園でオープン形式により実施することの意義は，交流型こども食堂として，従来の室内型こども食堂に比べて，より多くの人々が自然に立ち寄りやすい環境を提供できる点にある。さらに，こども食堂に賑わいを生み出しやすい。張は，こども食堂の特徴と課題として「つながり」と「地域つくりの場」を挙げている[5]。また湯浅は，こども食堂の大きな目的の一つに「地域のにぎわいつくり」を挙げ，それが「子どもを中心とした多世代交流拠点」となり，交流と体験，「つながり」を提供すると述べている。子どもたちは交流と体験を通じて，価値観を広げることができ，人生の選択肢も広げられると考える[6]。こうした「つながりの提供」こそ貧困対策に繋がると述べている。

従来のこども食堂は室内での活動が中心で，施設や運営の条件によって，参加する家庭や子どもが限られてしまうことも少なくない。室内で開催されるこども食堂は，気になるけど中が見えないため，遠慮や戸惑いが生じやすい。これに対し，公園で開催されるこども食堂は，地域住民が通りがかりに公園内を見渡すことができる。さらに，立ち寄りやすい環境であるため，賑わいも生まれやすい。

小林，五島では，こども食堂が室内から屋外の公園に移ることで，地域住民が生活の中でその活動に気づき，参加しやすい環境になり得ることを述べた[7]。公園型こども食堂には，外から全て見える環境であり，入口も仕切もない公園ならではの参加のしやすさがある。また，公共の場所であるという共通認識が人を呼び込み，賑わいが生まれ，多世代交流といえる地域の「居場所」となり得る。誰もが気軽に参加することを可能にするなら，湯浅の提唱する，青信号の家庭が参加することで黄色信号と赤信号の家庭も自然に参加しやすい環境[2]を作りだしていると言える。岩垣，長瀬，扇原によるこども食堂の役割に関する研究の結果でも，その役割が「子どもや保護者の居場所」「多世代が交流できる場所」「地域の人とつながりを作る場所」であることが明らかにされており[8]，公園で開催するこども食堂は，この役割を担うことができる。

Ⅲ．公園開催で期待される効果

小林，五島で，こども食堂が公園で開催されることによって，地域の多様な人々が気軽に立ち寄りやすくなり，地域住民同士が自然に会話を交わし，交流する場が生まれることが論じられている[7]。「どなたでもどうぞ」というオープンな形式で運営されるこども食堂は，特に孤立しがちな家庭や個人にとって精神的な支えとなり，安心して訪れることができる「居場所」としての役割を果たすことができる。公園という解放的な場が持つ特性が，参加者の心理的な垣根を取り除き，日常的な交流を促進する基盤となる。

井上によるこども食堂（室内形式）の空間特性の研究によると，食事スペースのみの空間と，食事スペースに加えて遊びスペースがある空間では，遊びスペースがある方が参加者同士の交流が生まれやすいという結果がある[9]。公園は，ほぼ全てを遊びスペースにできることから，参加者同士の交流が生まれやすい空間特性であり，多世代交流を生みやすい効果がある。七星はこども食堂と居場所の関係について，こども食堂は，子どもの居場所と大人の居場所が融合し，参加者と場の作り手の境界も融解され，こども食堂に関わる人達の「居場所」といえる場になると述べている[10]。

特にオープン形式のこども食堂は，子どもだけでなく大人にとっても居場所となり得る。この形式では，大人同士にも世間話が生まれやすく，会話が深まり，困りごとや悩みの相談にも繋がる。このような自然な交流が育まれることで，こども食堂は地域の支え合いの核としての役割を担える。公園という場の特性を活かすことで，こども食堂は，地域住民が互いに安心して話を交わせる居場所としての意義を強めることに貢献できる。

Ⅳ．公園型こども食堂で起こっていること

公園でこども食堂を開催し続けている「エリーズカフェこども食堂」がある。ここは「誰でもどうぞ」のオープンスタイルで，障害のある人や，地域の人，学生たちが関わり毎月 150 ～ 300 食を準備する。準備を進めていると，こども食堂が始まる前から子どもが集まる。準備を手伝う子ども，遊ぶ子ども，食べ始める子ども，それぞれがそれぞれの楽しみ方をしている。みんなでご飯を食べるのではなく，公園に集まり遊ぶことが地域の子どもたちの楽しみになっている。公園で食べる子ども，食べないで遊んで帰る子ども，食事を持ち帰る子ども，好きな時に来て帰る，ばらばらである。

大人達は公園で世間話を始める。地域の顔がつながり，こども食堂関係者もその中に入れてもらい，地域との関係が深まっていく。そしてそこは参加者の「居場所」となる。さらに，誰でも気軽にできる相談窓口としての役割も生まれている。実際の事例を挙げながら考えていく。

1．事例：母子（未就学児）

こども食堂に参加している母子から相談を受けた。母子家庭であり，未就学の子どもは発達障害があり，幼稚園や保育園ではなく，療育センターへ通っている。エリーズカフェは障害福祉サービス事業をしているのか？という相談を受けた。エリーズカフェでは年齢に関係なく，未就学児でも利用できるサービスを実施している。そこでサービス内容と利用の対象であることを説明すると，その家庭にとって必要なサービスであることがわかり，行政へサービス利用の手続きを経て，エリーズカフェの実施する障害福祉サービスの利用へと繋がった。

2．事例：小学生（支援級）

こども食堂に参加している母子から相談を受けた。子どもは小学校の支援級に在籍しているが小学校に行けていない。小学校には行けないが公園開催であるエリーズカフェこども食堂には親子で来ることができるので，エリーズカフェに通うことはできないか？という相談を受けた。小学校や行政とも調整をしながら，学校ではなくエリーズカフェへ行く日を作り，通うようになった。

エリーズカフェには日常的に，放課後小学生が遊びに来る。すると学校には行けずエリーズカフェで過ごしている小学生と，学校帰りに放課後遊びに来た小学生がエリーズカフェで出会い，自然と交流が生まれている。それは今まで学校を休んでいた時には起きえない交流であり，新たな子ども同士の交流の場となっている。

エリーズカフェは普段，障害福祉サービス事業を実施していることから，他人には相談しにくい家庭の悩み相談を受け，福祉サービスに繋げるということも自然に起きている。このように，エリーズカフェこども食堂が提供する居場所は，経済的支援が必要な家庭にとどまらず，地域住民の「誰もが参加できる場」となり，気軽にできる相談窓口として機能している。

地域の人たちにとって，こども食堂が気軽に相談できる場所であると認識されることにより，通常であれば行政や教育機関の専門窓口に相談することだが，敷居が高く，相談をためらったり，相談することを辞めてしまったり，わざわざ相談するほどのことではないと決めつけてしまうということを防止できる。障害福祉サービス事業所であるエリーズカフェの主催する公園型こども食堂では，気軽に相談できる福祉の窓口の役割も担っているといえる。

3．事例：家に入れない子ども

こども食堂以外の日にも小学生は，ふらっとカフェに立ち寄る。普段は何気ない会話や，冗談を言い合い過ごして帰るが，ある日「今日帰っても家に入れないかもしれない」「入れなかったらカフェに来ていい？」という相談を受けた。話を聞くと，親と喧嘩したから家に入れてもらえないかもしれない，父親と上手くいっていないことなど家庭環境について話してくれた。そして家に帰ったが，「家に入れなかった」とカフェに戻ってきた。

この子こどもの家庭状況を把握し，見守る大人は存在するのだろうか？経済的に困っておらず，学校でも特に問題を起こしていない小学生であれば，こうした状況になかなか気づくことはできない。こういった家庭の会話は，日常会話ではなされない。何かが起きた後か，起きる直前に，思い詰めて吐き出される。しかし，何かが起きる前，つまり事件が起きる前に予防する必要がある。

行政は事件が起きた後，「赤信号」となった家庭や子どもに公的措置をとることは得意だが，予防的な支援については苦手である。しかし，こども食堂は，事件が起きて「赤信号」になってしまう前に，予防的なかかわりを持つことができる。このことこそ，こども食堂が得意とすることであり，またこども食堂の役割であると湯浅も提唱し続けている。

行政が，事件が起きる前に相談に来るように訴えかけても，なかなか相談窓口には繋がりにくいのが現状である。エリーズカフェは，子どもからの気軽な相談窓口となり「居場所」となっている。このような，居場所のない子どもは「孤独」ともいえる。

F. ルッソの「孤独の科学」によると，若年層の孤独の研究が特に重視されなければならない。何故なら，この年代の孤独感は生涯にわたって影響するからである。孤独な子どもは青年期にうつ状態になりやすいという調査結果も示されており，成人になってうつ病を患うリスクが高い[11]。

子どもの孤独解消のための「居場所」作りは，その子どもの生涯に大きく影響を与える。居場所についての課題は，2021 年に孤独孤立対策担当大臣が設置された。したがって，居場所の課題は，国民的課題であるといえるが，居場所づくりは行政サービスにはなじまないと湯浅は提言し，こども食堂がその居場所になるという役割が期待されている[12]。

V．公園開催の意義

こども食堂が公園でオープン形式によって開催されていることの意義は，これまでの室内型こども食堂の枠を超え，地域社会に新たな可能性を示す開催形式であることにある。公園という開放的な環境は，誰もが気軽に立ち寄ることができ，食事を目的とするだけでなく，自然に遊びや交流が生まれる場となり得る。この形式は，地域住民が心理的な垣根を感じることなく参加できる条件を整え，子どもから高齢者まで，あらゆる世代が互いに関わり合う場を提供する。その結果，地域の賑わいが生まれ，多くの人々が公園を訪れるようになり，湯浅の提唱する，黄色信号の子どもが青信号の顔をして参加できる地域の「居場所」となり，地域社会全体に活気を与え得る[2]。

Ⅵ. 結論

こども食堂の公園型オープン形式は，地域住民が自然に交流しやすい環境を提供する開催形式として，こども食堂の新たな方向性を示している。開放的な公園という空間が，地域の多様な人々をつなぎ，心理的な垣根を取り除くことで，誰もが気軽に参加できるようになっている点は，従来の室内型こども食堂にはない大きな利点である。

公園型オープン形式には障害児・者が積極的に関わっており，多世代交流の場を超えて，共生社会のモデルとして機能している。事例1，事例2では，公園型オープン形式のこども食堂が，障害のある子どもたちとその家族に気軽に相談できる場を自然に提供していることを示している。すなわち，行政等の専門窓口へ行く前に，気軽に相談できる窓口の役割を果たしている。このことは，福祉の観点からも大きな意義を持っている。

事例3では，「家に入れないかもしれない」と不安を抱える小学生が，こども食堂を居場所として頼り，家庭内の問題を抱える子どもが気軽に相談できる場として機能していることを示している。このように，こどもたちが孤立することなく，日常の不安や問題を話せる居場所を提供することは，子どもたちの心の支えとなり，彼らの未来に大きな影響を与えている。

F. ルッソが指摘するように，孤独な子どもは将来うつ病や精神的な問題を抱えるリスクが高まる[11]。しかし，湯浅が言う行政が苦手な居場所作りを，こども食堂が担うことによって，そのリスクを軽減することができる[12]。

このように，公園型オープン形式は，単なる経済的支援を超え，地域の福祉向上と共生社会の実現に向けた重要な役割を担っている。行政の協力を受けながら，地域全体のつながりを深め，多世代交流をさらに発展させているこの活動は，今後も多くの地域で新たなコミュニティモデルとして広がり，持続可能な共生社会を構築していくことが期待される。

参考文献

1) 認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ，調査・研究事業，https://musubie.org/，2024/11/16.

2) 湯浅誠：こども食堂の過去・現在・未来，地域福祉研究，7，2019：pp,15-27.

3) 湯浅誠：地域の居場所とwell-being，JP総研Research，59，2022：pp,4-15.

4) 湯浅誠：居場所づくりから考える地域づくり：都市計画360，71，2023：pp,34-39.

5) 張舒萌：子ども食堂研究における特徴と課題について－こども食堂を通じて形成されるつながりを手がかりに－，教育福祉研究，27，2023：pp,53-63.

6) 湯浅誠：つながり続けるこども食堂，中央公論新社，2021：pp,1-9.

7) 小林貴大，五島史子：こども食堂を通じた社会福祉－障害福祉のサービス利用者がこども

食堂に関わる意義ー，田園調布学園大学，第 7 号，2024：pp,75-85.
8) 岩垣穂大，長瀬健吾，扇原淳：こども食堂の役割および継続的な運営に関する研究，日本地域福祉学会，33，2020：pp,21-36.
9) 井上真奈：子ども食堂の活動実態と空間特性の研究－名古屋市の子ども食堂を対象としてー，修士論文梗概集，2019：pp,13-16.
10) 七星純子：2 章「子ども食堂」と「居場所」論，千葉大学ダウ学院人文公共学府研究プロジェクト報告書，345，2019：pp,13-28.
11) F ルッソ：孤独の化学，日経サイエンス，7，2018：pp,59-64,
12) 湯浅誠：居場所の政策論〈試論〉～こども食堂を切り口に考える～，地域福祉研究，51，2023：pp,32-44.